

(公印省略)

14病防第1号の5
平成14年8月1日

各関係機関の長 殿

福岡県病害虫防除所長

病害虫発生予察情報について(送付)

このことについて、病害虫発生予報第5号(8月)を発表したので送付します。

平成14年度病害虫発生予報第5号(8月)
主要病害虫の発生現況及び予報の概要

【普通作物】

作物名	病害虫名	発生現況 (平年比)	発生予想 (平年比)
普通期水稲	葉いもち	並	並
	穂いもち	-	並
	紋枯病	並	並
	セジロウンカ	やや少ない	やや少ない
	トビイロウンカ	やや少ない	やや少ない
	コブノメイガ	並	並
	斑点米カメムシ類	並	並
大豆	ハスモンヨトウ	多い	多い

斑点米カメムシ類については、前年対比。

【普通作物 - 普通期水稲】

1 葉いもち・穂いもち

(1) 予想の内容

発生量：平年・前年並

(2) 予報の根拠

ア 7月5半旬調査の結果、発病株率は14.3% (平年：7.1%、前年：11.7%)、発生ほ場率は25.0% (平年：30.0%、前年：41.0%)であった。しかし、一部では多発しているほ場が認められた。

イ 気象予報では8月の平均気温、降水量及び日照時間は平年並と予想されている。

(3) 防除上注意すべき事項

ア 葉いもちの発生が多いほ場では、早急に防除を行う。

- イ 穂いもちに対する粉剤や液剤の防除適期は出穂直前である。上位葉に病斑が目立つほ場や常発地では、さらに2回目の防除を穂揃期に行う。
粒剤やパック剤による防除を行う場合は、粉剤や液剤の防除適期より早いので、施用時期に注意する。
- ウ 防除薬剤については「平成14年度普通作物病害虫防除基準」を参照する（以下の病害虫も同様）。

2 紋枯病

(1) 予報の内容

発生量：平年・前年並

(2) 予報の根拠

ア 7月5半旬調査の結果、発病株率は1.2%（平年：1.6%、前年：2.4%）、発生ほ場率は10.9%（平年：21.5%、前年：29.5%）であった。

イ 気象予報では8月の平均気温、降水量及び日照時間は平年並と予想されている。

(3) 防除上注意すべき事項

ア 粉剤を使用する場合、出穂2週間～10日前に防除を行う。

イ 粒剤を使用する場合、収穫前使用時期を過ぎる薬剤があるので、薬剤の種類に注意し、防除を行う。

3 セジロウンカ

(1) 予報の内容

発生量：平年よりやや少なく・前年並

(2) 予報の根拠

ア 7月5半旬までの飛来量は平年より少なかった。各地の予察灯、ネットトラップで6月11日、24～25日、6月29日～7月1日、7月17日～22日に飛来を確認した。

イ 7月5半旬調査の結果、10株当たり成幼虫数は8.1頭（平年：28.0頭、前年：11.4頭）、発生ほ場率は76.2%（平年：64.9%、前年：72.1%）であった。

ウ 8月以降の増殖は、例年少ない。

(3) 防除上注意すべき事項

ア 本虫を対象とした防除の必要はない。

イ 発生パターンは、別紙「平成14年度飛来に基づくセジロウンカ発生予想パターン図」を参照する。

4 トビイロウンカ

(1) 予報の内容

発生量：平年よりやや少なく、前年並

(2) 予報の根拠

ア 7月5半旬までの飛来量は各地の予察灯、ネットトラップでは平年より少なかった。しかし、筑後市の予察灯では7月18日～20日に18頭の飛来を確認した。

イ 7月5半旬調査の結果、10株当たり成幼虫数は0.1頭（平年：0.3頭、前年：0.1頭）、発生ほ場率は7.9%（平年：15.7%、前年：13.1%）であった。

(3) 防除上注意すべき事項

ア 要防除水準（8月上旬：20頭/100株、8月下旬：100頭/100株）を越える場合は、早急に防除を行う。

イ 発生パターンは、別紙「平成14年度飛来に基づくトビイロウンカ発生予想パターン図」を参照する。

5 コブノメイガ

(1) 予報の内容

発生量：平年並、前年よりやや多い

(2) 予報の根拠

7月5半旬調査の結果、食害株率は4.0%（平年：6.2%、前年：1.0%）、発生ほ場率は50.8%（平年：55.0%、前年：29.5%）であった。

(3) 防除上注意すべき事項

ア 薬剤散布は防除効果の高い発蛾最盛期から1週間後の若齢幼虫期に実施する。

イ 防除時期は、別紙「平成14年度飛来に基づくコブノメイガ発生予想パターン図」を参照する。

6 斑点米カメムシ類

(1) 予報の内容

発生量：前年並

(2) 予報の根拠

ア 7月5半旬の片振り20回すくい取り調査の結果、クモヘリカメムシ・ホソハリカメムシ・シラホシカメムシの3種は畦畔で0.6頭（前年：0.7頭）、雑草地で2.2頭（前年：3.2頭）であった。カスミカメムシ類は畦畔で12.4頭（前年：8.1頭）、雑草地で21.0頭（前年：24.4頭）であった。

イ 気象予報では8月の平均気温、降水量及び日照時間は平年並と予想されている。

(3) 防除上注意すべき事項

ア 出穂以降の畦畔や休耕田の除草は、カメムシ類の本田への飛び込みを助長するので、出穂以前に早めの除草を行う。

イ 防除適期は穂揃期とその7～10日後である。

ウ 水田周辺にイネ科雑草があるほ場や例年斑点米の発生が多い地域では、2回防除を徹底する。

エ 薬剤防除を行う場合は、水田周辺の畦畔などカメムシ類の発生源も含めた防除を行うとより効果が高い。

【普通作物 - 大豆】

1 ハスモンヨトウ（平成14年8月1日付注意報第5号発表）

(1) 予報の内容

発生時期：平年・前年より早い

発生量：平年・前年より多い

(2) 予報の根拠

ア 筑紫野市のフェロモントラップによる7月の誘殺虫数は872頭（平年：276.9頭、平成10年：418頭）と平年より多く、多発生年の平成10年より多い。（図参照）。

また、筑後市及び行橋市においても誘殺虫数が多い。

イ 大豆の播種は適期に行われ、生育は順調で本葉3枚以上になっており、ハスモンヨトウの産卵に好適になっている。

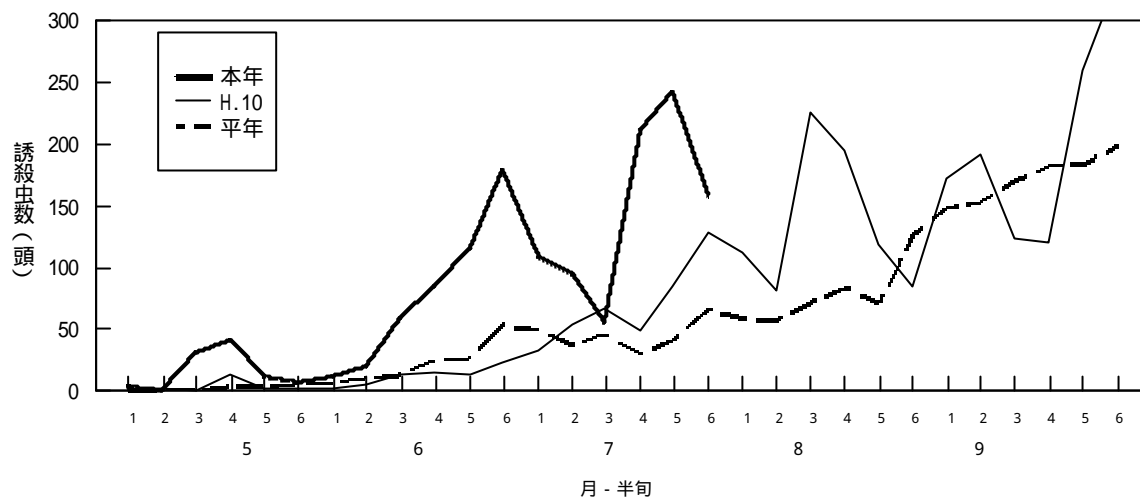
ウ 気象予報では8月の平均気温、降水量及び日照時間は平年並と予想されている。

(3) 防除上注意すべき事項

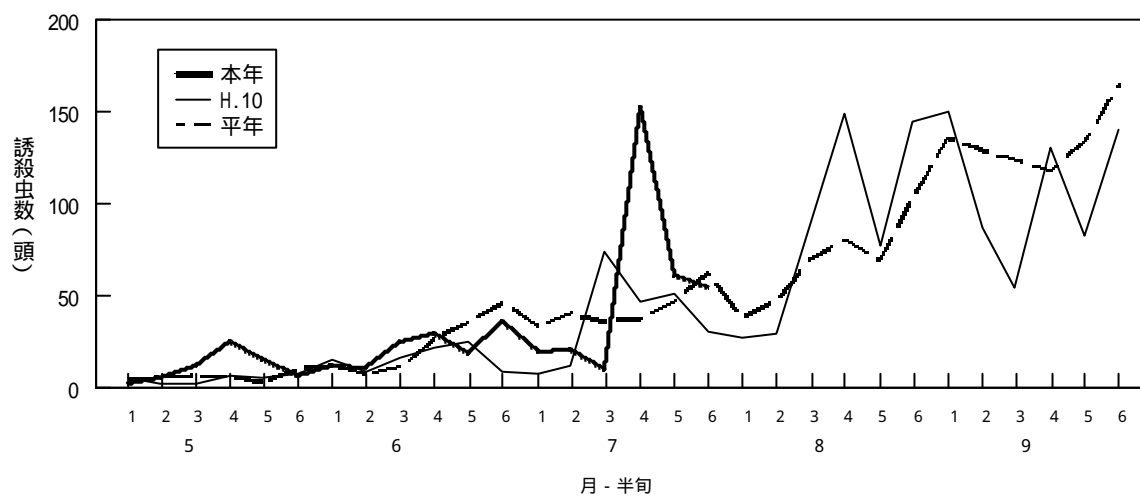
ア 分散前の若齢幼虫が群棲している白変葉は直ちに除去する。

イ 薬剤防除は効果の高い若齢幼虫期に実施する。

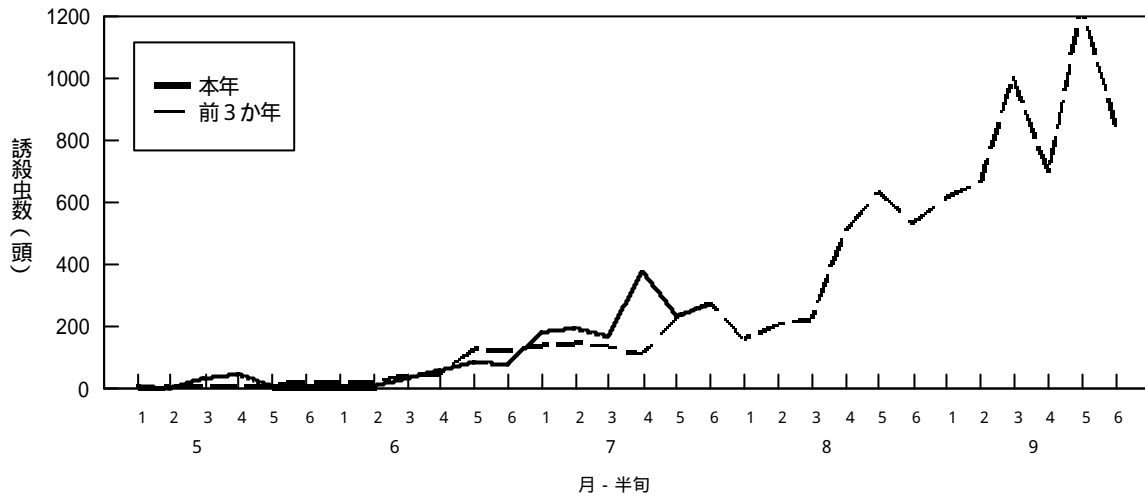
ウ フェロモントラップによる誘殺虫数を利用する場合は、誘殺ピークから10日目頃から早めに防除を開始する。



ハスモンヨトウのフェロモントラップによる誘殺虫数の推移 (筑紫野市)



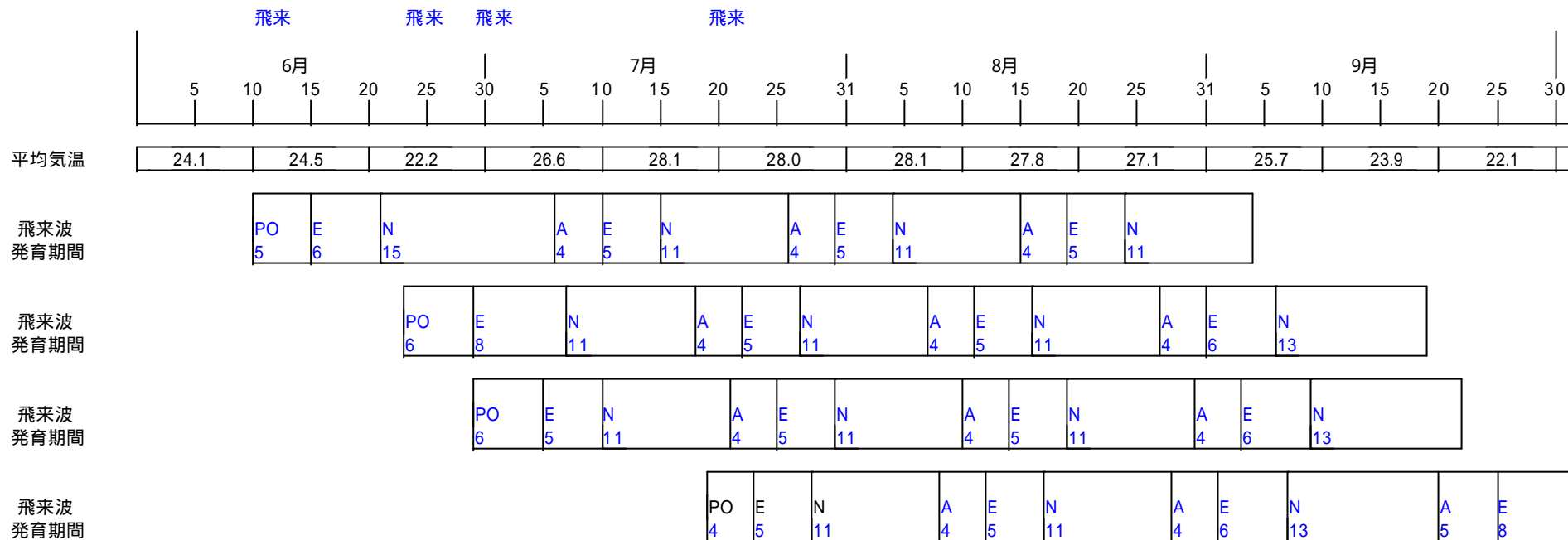
ハスモンヨトウのフェロモントラップによる誘殺虫数の推移 (筑後市)



ハスモンヨトウのフェロモントラップによる誘殺虫数の推移（行橋市）

別紙

14年度 飛来に基づくセジロウンカ発生予想パターン図

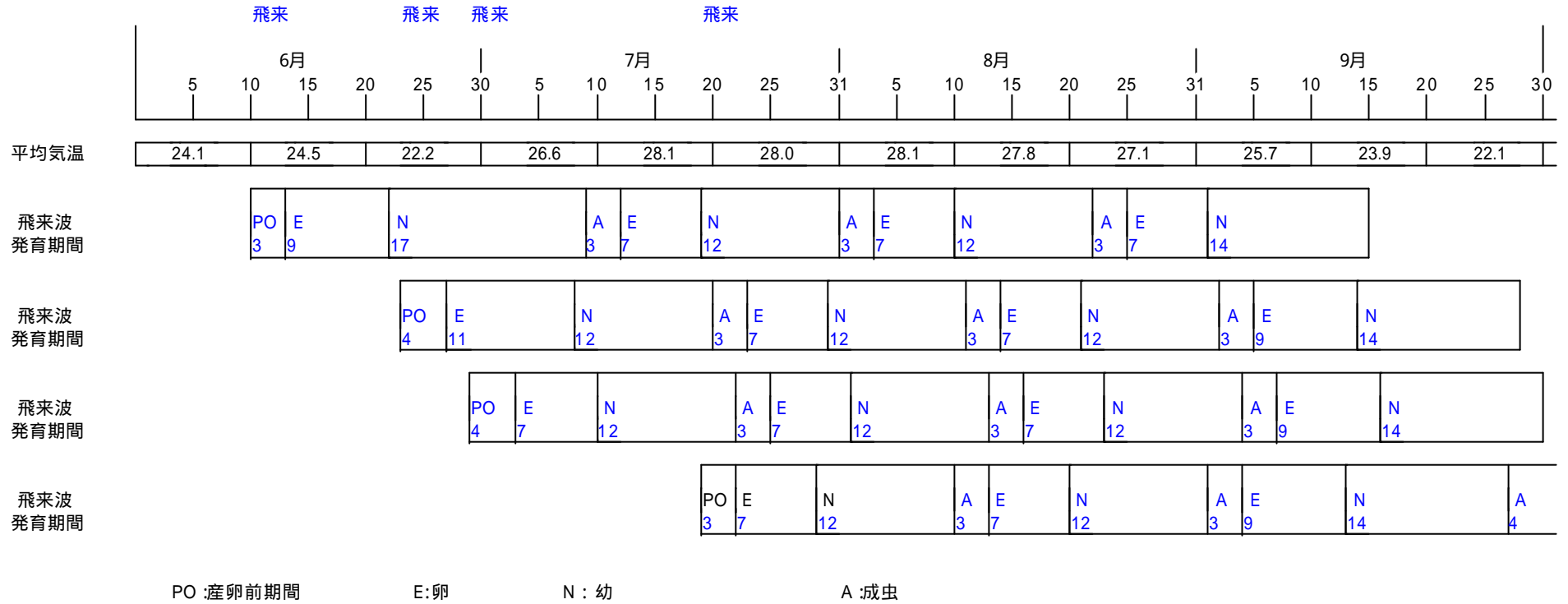


PO :産卵前期間 E:卵 N : 幼 A :成虫

平均気温は、福岡管区気象台福岡県農業気象速報の福岡観測所の数値。
 平均気温は7月中旬まで本年の数値で、7月下旬以降は平年の数値。

別紙

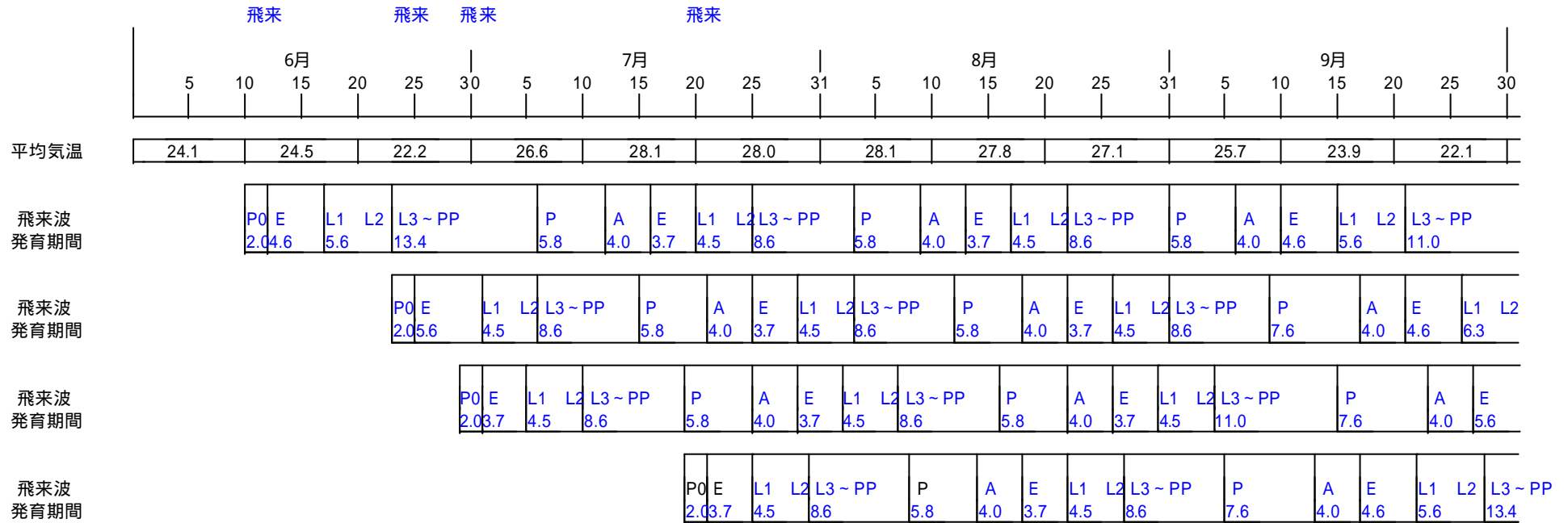
14年度 飛来に基づくトビイロウンカ発生予想パターン図



PO :産卵前期間 E:卵 N : 幼 A :成虫

平均気温は、福岡管区気象台福岡県農業気象速報の福岡観測所の数値。
 平均気温は7月中旬まで本年の数値で、7月下旬以降は平年の数値。

14年度 飛来に基づくコブノメイガ発生予想パターン図



PO :産卵前期間 E :卵 L :幼虫 (完全変態) PP :前蛹 P :蛹 A :成虫

平均気温は、福岡管区気象台福岡県農業気象速報の福岡観測所の数値。
平均気温は7月中旬まで本年の数値で、7月下旬以降は平年の数値。

【果 樹】

作物名	病虫害名	発生現況 (平年比)	発生予想 (平年比)
カンキツ	黒点病 ミカンハダニ	やや少ない やや多い	やや少ない やや多い
ナシ	ナシヒメシンクイ ハダニ類	やや多い 並	やや多い 並
カキ	炭疽病 うどんこ病 フジコナカイガラムシ ハマキムシ類	やや少ない やや少ない 多い やや多い	やや少ない やや少ない 多い やや多い
ナシ、カキ カンキツ類等	カメムシ類	多い	多い

【果 樹】

1 カンキツの黒点病

(1) 予報の内容

発生量：平年・前年よりやや少ない

(2) 予報の根拠

ア 7月5半旬の調査では、発病果率は0.9%（平年：1.7%、前年：6.0%）、発生ほ場率は21.1%（平年：28.6%、前年：36.8%）であった。

イ 気象予報では、8月の平均気温、降水量は平年並と予想されている。

(3) 防除上注意すべき事項

ア 降雨が続くと多発するので、積算降水量250mm毎に薬剤散布を行う。

2 カンキツのミカンハダニ

(1) 予報の内容

発生量：平年・前年よりやや多い

(2) 予報の根拠

ア 7月5半旬の調査では寄生葉率は平均25.2%（平年：10.4%、前年：13.6%）、発生ほ場率は68.4%（平年：50.3%、前年：57.9%）であった。

イ 気象予報では、8月の平均気温、降水量は平年並と予想されている。

(3) 防除上注意すべき事項

ア 防除にあたっては、雌成虫の寄生葉率が30～40%を目安とし、葉裏にも十分薬液がかかるように丁寧に散布する。

イ 各種薬剤に対する感受性の低下を避けるため、同一系統薬剤を連続して使用せず、数系統の薬剤を組み込んだローテーション散布を行う。

3 ナシのナシヒメシンクイ

(1) 予報の内容

発生時期：平年・前年よりやや早い

発生量：平年・前年よりやや多い

(2) 予報の根拠

ア フェロモントラップによる第2世代成虫の発蛾最盛期は、平坦地域で6月5半旬、山間地域で7月2半旬頃であり、平年よりやや早かった。

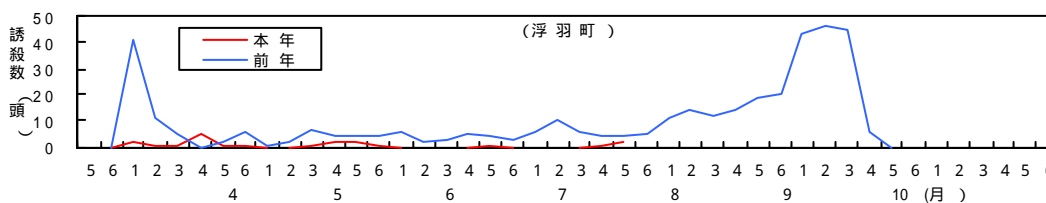
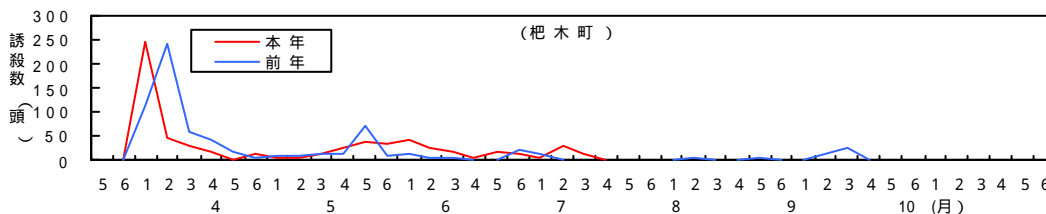
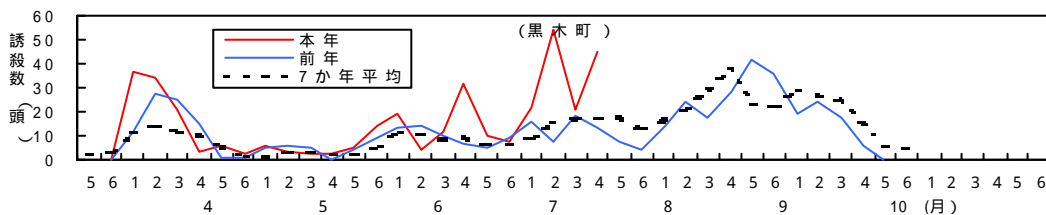
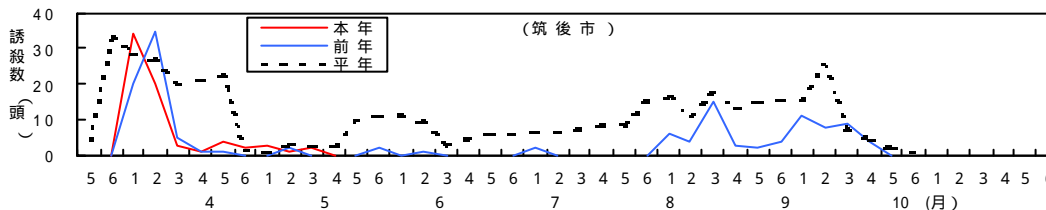
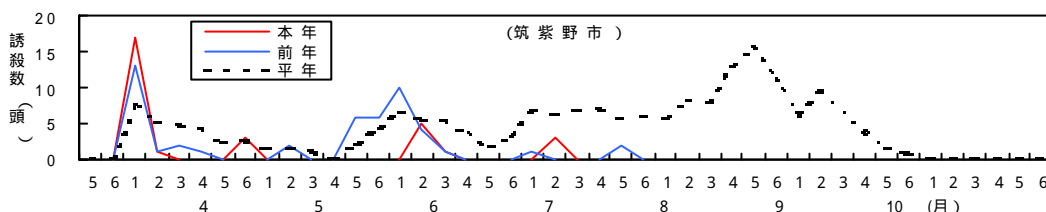
イ 気象予報では、8月の平均気温、降水量は平年並と予想されている。

(3) 防除上注意すべき事項

ア 第3世代成虫の発蛾最盛期は平坦地域で7月5～6半旬、山間地域で8月1～2半旬頃と予想されるので、ほ場での成虫の発生に注意し、発蛾最盛期に7～10日間隔で2～3回防除する。

イ 幼虫は主として果頂部から果実に食入加害するので、防除に当たっては、果実に十分薬液がかかるように散布する。

ウ 交信攪乱剤を使用する場合は、傾斜地ほ場や小面積では効果が低下するので注意する。



4 ナシのハダニ類

(1) 予報の内容

発生量 : 平年・前年並

(2) 予報の根拠

ア 7月5半旬の調査の結果、寄生葉率は平均11.2% (平年: 11.5%、前年: 15.3%)、発生ほ場率は62.5% (平年: 45.1%、前年: 75.0%)であった。

イ 気象予報では、8月の平均気温、降水量は平年並と予想されている。

(3) 防除上注意すべき事項

ア 防除にあたっては、薬液が葉裏にも十分かかるように丁寧に散布する。

イ 各種薬剤に対する感受性の低下を避けるため、同一系統薬剤を連続して使用せず、数系統の薬剤を組み込んだローテーション散布を行う。

5 カキの炭疽病

(1) 予報の内容

発生量 : 平年・前年よりやや少ない

(2) 予報の根拠

ア 7月5半旬の調査では、発病枝率は平均0.9% (平年: 3.0%、前年: 1.1%)、発生ほ場率は平均25.0% (平年: 36.6%、前年: 13.3%)、発病果率は平均0.6% (平年: 1.0%、前年: 1.4%)、発生ほ場率は平均25.0% (平年: 32.3%、前年: 13.3%)であった。

イ 気象予報では、8月の平均気温、降水量は平年並と予想されている。

(3) 防除上注意すべき事項

ア 樹冠内部の徒長枝に感染し、発病しやすいので、防除にあたっては薬液が樹冠内部にも十分かかるように丁寧に散布する。

イ 罹病枝及び罹病果は、感染源になるので極力除去する。

6 カキのうどんこ病

(1) 予報の内容

発生量 : 平年・前年よりやや少ない

(2) 予報の根拠

ア 7月5半旬の調査では、発病葉率は平均4.7% (平年: 10.7%、前年: 6.7%)、発生ほ場率は平均68.8% (平年: 73.8%、前年: 66.7%)であった。

イ 気象予報では、8月の平均気温、降水量は平年並と予想されている。

(3) 防除上注意すべき事項

防除効果の高い薬剤を葉裏にも十分薬剤がかかるように丁寧に散布する。

7 カキのフジコナカイガラムシ

(1) 予報の内容

発生量 : 平年・前年より多い

(2) 予報の根拠

ア 7月5半旬の調査では寄生果率は平均14.9% (平年: 4.4%、前年: 3.1%)、発生ほ場率は平均87.5% (平年: 35.9%、前年: 80.0%)であった。

イ 気象予報では、8月の平均気温、降水量は平年並と予想されている。

(3) 防除上注意すべき事項

- ア 発生が多いほ場では、第2世代幼虫の発生時期である8月上旬の防除を徹底する。
- イ 本虫は、ヘタの下や葉と重なった果実の表面などの薬剤がかかり難い箇所によく寄生しているので、十分な薬量を使って散布むらのないように防除する。

8 ナシ、カキ、カンキツ等のカメムシ類

(1) 予報の内容

発生量：平年・前年より多い

(2) 予報の根拠

- ア 筑紫野市吉木の予察灯・集合フェロモントラップにおける4月1半旬～7月5半旬までのカメムシ類の累計誘殺数は、下表のとおり前年より著しく多い。
- イ 7月5半旬のナシの調査では、被害果率は平均0.8%（平年：0.1%、前年：0%）で、被害がやや多く発生している。
- ウ 7月5半旬のカキの調査では、被害果率は平均2.1%（平年：0.4%、前年：0%）で、被害が多く発生している。
- エ 7月5半旬のヒノキ球果のビーティング調査では、チャバネアオカメムシ、ツヤアオカメムシの寄生頭数は、1地点当たり20.7頭（平年7.6頭）と多かった。
- オ 県内15カ所の7月下旬のヒノキ球果における1果当たり口針鞘数は、平均で13.9本、被害球果率も100%であった。これは、調査を開始した6年間では最も多い。
- カ 気象予報では、8月の平均気温、降水量は平年並と予想されている。

(3) 防除上注意すべき事項

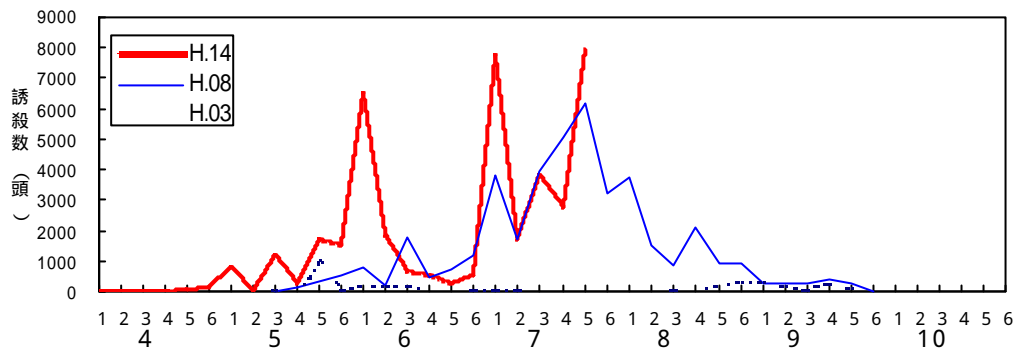
- ア 地域によりヒノキ球果の結実量に差があるため、飛来時期が異なる。果樹園内をよく見回り、発生状況に応じて防除を行う。
- イ 防除薬剤は平成14年度果樹病害虫防除基準を参照し、農薬安全使用基準（収穫前日数・使用回数）を遵守する。また、樹種によって使用できる薬剤が異なるので注意する。
（平成14年7月18日付け果樹カメムシ類警報第1号を参照）

予察灯及び集合フェロモンによるカメムシ類の誘殺虫数（筑紫野市吉木）

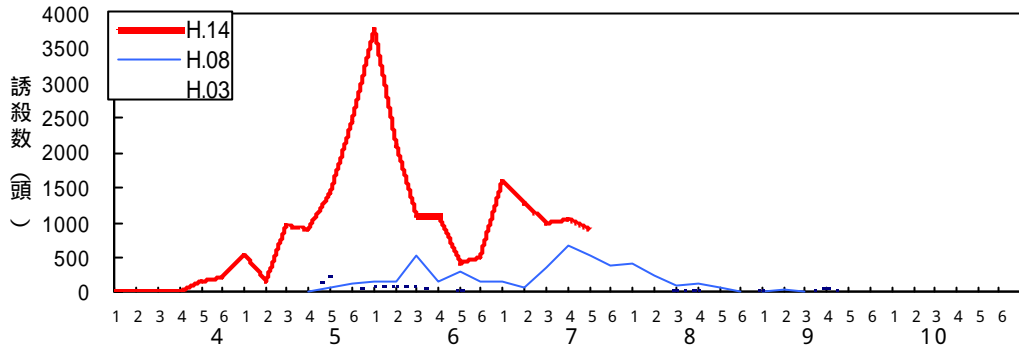
調査時期	チャバネアオカメムシ		ツヤアオカメムシ		クサギカメムシ	
	予察灯	集合フェロモントラップ	予察灯	集合フェロモントラップ	予察灯	集合フェロモントラップ
4月1半旬	0(0)	5(0)頭	0(0)	0(0)頭	0(0)	1(0)頭
2	2(0)	16(0)	3(0)	0(0)	0(0)	0(0)
3	0(0)	11(0)	7(0)	0(0)	0(0)	0(0)
4	6(0)	1(0)	15(0)	0(0)	0(0)	0(0)
5	115(0)	465(3)	174(0)	3(0)	3(0)	0(0)
6	156(0)	145(2)	215(0)	28(0)	5(0)	5(0)
5月1半旬	792(0)	869(8)	535(0)	53(0)	8(0)	10(0)
2	51(1)	29(31)	159(0)	3(1)	0(0)	1(0)
3	1,209(0)	925(10)	951(0)	196(0)	5(0)	16(0)
4	279(1)	356(9)	910(2)	213(0)	0(0)	6(0)
5	1,709(10)	2,593(11)	1,419(8)	1,338(4)	2(0)	22(0)
6	1,528(5)	2,669(21)	2,433(4)	901(5)	6(0)	15(2)
6月1半旬	6,507(2)	11,141(6)	3,754(2)	3,458(0)	45(0)	68(0)
2	1,820(6)	2,511(16)	2,103(5)	414(0)	28(0)	30(0)
3	728(11)	1,104(12)	1,091(2)	181(1)	37(1)	17(0)
4	544(6)	1,477(17)	1,112(2)	157(0)	60(0)	21(0)
5	288(4)	208(1)	417(1)	36(0)	43(0)	11(0)
6	550(0)	1,283(1)	498(0)	16(0)	38(1)	25(0)
7月1半旬	7,790(2)	22,750(8)	1,592(0)	84(0)	1,145(0)	116(1)
2	1,694(0)	7,992(2)	1,265(0)	53(0)	686(0)	125(0)
3	3,828(0)	19,020(0)	984(1)	296(0)	1,070(0)	150(0)
4	2,783(0)	13,800(0)	1,039(0)	58(1)	618(0)	76(0)
5	7,925(0)	9,088(0)	891(0)	32(0)	1,525(0)	28(0)
合計	40,304(48)	98,458(158)	21,567(27)	7,520(12)	5,324(2)	743(3)

注1) 予察灯：20Wブラックライト

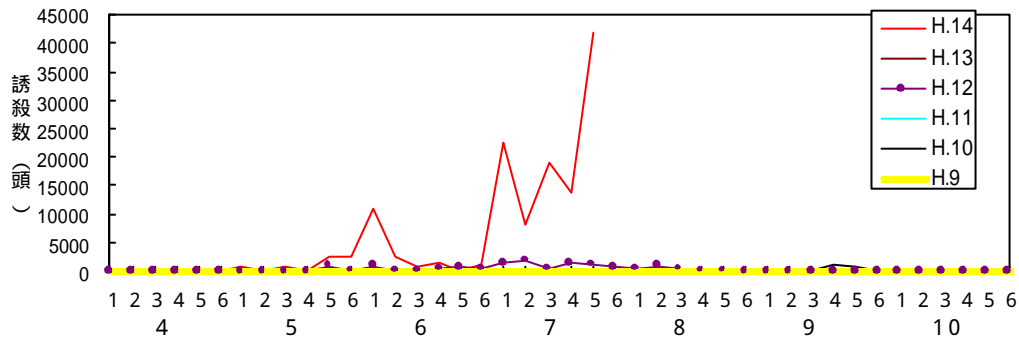
注2) ()は前年の誘殺虫数



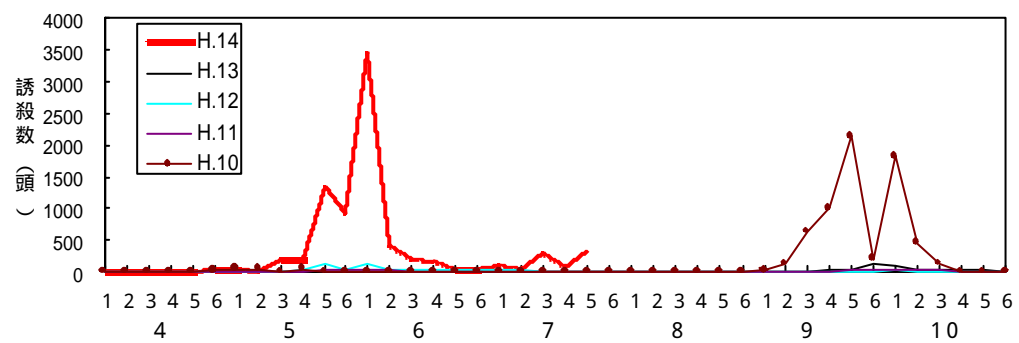
予察灯によるチャバネアオカメムシの誘殺虫数 (筑紫野市)



予察灯によるツヤアオカメムシの誘殺虫数 (筑紫野市)



集合フェロモンによるチャバネアオカメムシの誘殺虫数 (筑紫野市)



集合フェロモンによるツヤアオカメムシの誘殺虫数 (筑紫野市)

【茶】

作物名	病虫害名	発生現況 (平年比)	発生予想 (平年比)
茶	炭疽病 もち病 輪斑病 カンザワハダニ チャノコカクモンハマキ チャノミドリヒメヨコバイ チャノキイロアザミウマ	やや少ない やや少ない 並 やや多い やや少ない やや多い やや多い	やや少ない やや少ない 並 やや多い やや少ない やや多い やや多い

平年値（過去10年間の平均）がない場合は、前年までの平均値を用いた。

【茶】

1 炭疽病

(1) 予報の内容

発生量 : 平年よりやや少なく、前年並

(2) 予報の根拠

ア 7月5半旬の調査では、1㎡当たり病葉数は平均0.7葉（平年：4.7葉、前年：0.4葉）であった。

イ 気象予報では、8月の平均気温、降水量は平年並と予想されている。

(3) 防除上注意すべき事項

ア 整枝後の残葉での発生に注意し、萌芽から1～2葉期までに薬剤防除を実施する。

イ 本病原菌の各種薬剤に対する感受性が低下するのを避けるため、同一系統薬剤を連続して使用しない。

ウ 防除薬剤は「平成14年度茶・いぐさ病虫害防除基準」を参照する。農薬安全使用基準を守り、危被害防止に努める（この項は以下の病虫害についても同様）。

2 輪斑病

(1) 予報の内容

発生量 : 平年・前年並

(2) 予報の根拠

ア 7月5半旬の調査では、1㎡当たり病葉数は平均0.9葉（1㎡当たり病葉数 平年：0.4葉、前年：0.3葉）であった。

イ 気象予報では、8月の平均気温、降水量は平年並と予想されている。

(3) 防除上注意すべき事項

ア 葉や茎の傷口から病原菌が感染するため、三番茶摘採または刈り落としの当日あるいは翌日に薬剤防除を実施する。

イ 輪斑病の発生園では、新梢枯死症も発生しやすいので注意する。

3 チャノコカクモンハマキ

(1) 予報の内容

発生時期 : 平年・前年よりやや早い

発生量 : 平年よりやや少なく、前年並

(2) 予報の根拠

ア フェロモントラップによる7月5半旬までの累計誘殺数は、筑後市で835頭（前8か年平均：1,138頭、前年：792頭）、八女市で375頭（前年：325頭）であった。

イ 7月5半旬の調査では、巻葉は認められなかった（1㎡当り巻葉数 平年：0.2葉、前年：0.01葉）。

ウ 気象予報では、8月の平均気温、降水量は平年並と予想されている。

(3) 防除上注意すべき事項

ア 巻葉後の防除効果は劣るため、巻葉がみられたら直ちに防除を行う。

イ フェロモントラップによる調査では、第3世代成虫の発蛾最盛期は、8月3半旬頃と予想されるので、ほ場内の成虫の発生に注意し、発蛾最盛期の7日後に防除を行う。

4 チャノミドリヒメヨコバイ

(1) 予報の内容

発生量 : 平年・前年よりやや多い

(2) 予報の根拠

ア 7月5半旬のたたき落とし法による調査では、平均1.3頭（平年：0.7頭、前年：0.3頭）の発生であった。

イ 気象予報では、8月の平均気温は平年並、降水量は平年並と予想されている。

(3) 防除上注意すべき事項

萌芽期から新葉展開期の防除が重要で、たたき落とし法（A4版白紙上）で4頭以上発生している場合は防除を行う。

5 チャノキイロアザミウマ

(1) 予報の内容

発生量 : 平年・前年よりやや多い

(2) 予報の根拠

ア 7月5半旬のたたき落とし法による調査では、平均7.3頭（平年：4.0頭、前年：2.7頭）の発生であった。

イ 気象予報では、8月の平均気温、降水量は平年並と予想されている。

(3) 防除上注意すべき事項

萌芽期から新葉展開期の防除が重要で、たたき落とし法（A4版白紙上）で10頭以上発生している場合は防除を行う。

【野 菜】

作物名	病虫害名	発生現況 (平年比)	発生予想 (平年比)
イチゴ (育苗床)	うどんこ病 炭疽病 アブラムシ ハダニ類	やや少ない やや多い やや多い やや少ない	やや少ない やや多い やや多い やや少ない
アスパラガス	斑点病 ハダニ類 アブラムシ類 アザミウマ類 ヨトウ・タバコガ類	少ない 並 並 並 並	少ない 並 並 並 並
ネギ	ネギハモグリバエ シロイチモジヨトウ	やや多い やや多い	やや多い やや多い
野菜共通	ハスモンヨトウ	多い	多い

・アスパラガスは、前々年からの調査のため、前年値との比較である。

1 イチゴのうどんこ病

(1) 予報の内容

発生量：平年よりやや少なく、前年並

(2) 予報の根拠

ア 7月5半旬調査の結果、子株での発病株率は平均0.9%（前9カ年平均：5.0%、前年：0.2%）であった。

イ 気象予報では、8月の平均気温、降水量は平年並と予想されている。

(3) 防除上注意すべき事項

ア 本ぼでの発病は発病（保菌）苗の持込みによるので、育苗期の防除を徹底して、健全苗の確保に努める。

イ 上位葉への感染を防ぐとともに、薬剤の付着をよくするため可能な限り下葉を除去する。

ウ 本病原菌の各種薬剤に対する感受性が低下するのを避けるため、同一系統薬剤を連続して使用せず、数系統の薬剤を組み込んだローテーション散布を行う。

2 イチゴの炭疽病

（*Colletotrichum acutatum* 菌による葉枯れ炭疽及び *Glomerella cingulata* 菌による炭疽病）

(1) 予報の内容

発生量：平年よりやや多く、前年並

(2) 予報の根拠

ア 7月5半旬調査の結果、子株での発病株率は平均0.9%（前9カ年平均：0.3%、前年：1.0%）であった。

イ 気象予報では、8月の平均気温、降水量は平年並と予想されている。

(3) 防除上注意すべき事項

- ア 発病後の薬剤散布は効果が低いため、予防散布に努める。特に、降雨後は感染しやすいので、重点的に散布する。
- イ 薬剤散布は株元まで十分かかるように行い、葉かき直後に実施する。
- ウ 本病原菌の各種薬剤に対する感受性が低下するのを避けるため、同一系統薬剤を連続して使用せず、数系統の薬剤を組み込んだローテーション散布を行う。
- エ 罹病株があると降雨やかん水により急速に蔓延するので、発病を確認した株は速やかに処分する。
- オ 輪斑病や疫病など類似の病徴を示すものがあり、判断がつかない場合は地域農業改良普及センタ - や当所へ同定を依頼し、病害を特定する。

3 イチゴのアブラムシ類

(1) 予報の内容

発生量：平年、前年よりやや多い

(2) 予報の根拠

- ア 7月5半旬調査の結果、子株での発病株率は平均5.7%（前9カ年平均：2.5%、前年：2.2%）であった。
- イ 気象予報では、8月の平均気温、降水量は平年並と予想されている。

(3) 防除上注意すべき事項

本害虫の各種薬剤に対する感受性が低下するのを避けるため、同一系統薬剤を連続して使用せず、数系統の薬剤を組み込んだローテーション散布を行う。

4 アスパラガスの斑点病

(1) 予報の内容

発生量：前々年、前年より少ない

(2) 予報の根拠

- ア 7月5半旬調査の結果、発病株率は平均3.3%（前々年：5.5%、前年：11.1%）であった。一部のほ場では多発している。
- イ 気象予報では、8月の平均気温、降水量は平年並と予想されている。

(3) 防除上注意すべき事項

- ア 過繁茂になると多発するので、整枝を的確に行いほ場内の通風をよくする。
- イ 発病部位はできる限り取り除き、薬剤による防除を徹底する。

5 アスパラガスのアザミウマ類

(1) 予報の内容

発生量：前々年、前年並

(2) 予報の根拠

- ア 7月5半旬調査の結果、寄生株率は平均33.3%（前々年：35.8%、前年：41.7%）であった。一部のほ場では多発している。
- イ 気象予報では、8月の平均気温、降水量は平年並と予想されている。

6 ネギのネギハモグリバエ

(1) 予報の内容

発生量：平年、前年よりやや多い

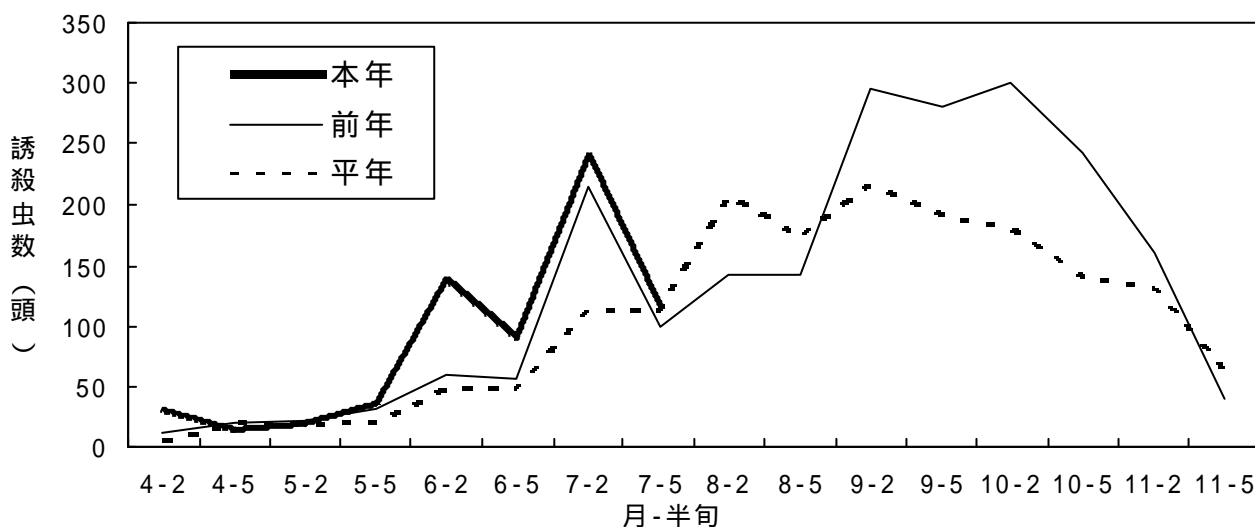
(2) 予報の根拠

- ア 7月5半旬調査の結果、被害株率は20%（前年：1.0%、平年：2.6%）であった。一部のほ場では多発している。

- イ 気象予報では、8月の平均気温、降水量は平年並と予想されている。
- (3) 防除上注意すべき事項
 - ア 幼苗期に防除を徹底する。
 - イ 収穫終了後にハウス内土壌の表面を1週間程度ビニルで覆い、土壌中の蛹の死滅を図る。

7 ネギのシロイチモジヨトウ

- (1) 予報の内容
 - 発生量：平年、前年よりやや多い
- (2) 予報の根拠
 - ア 7月5半旬調査の被害、寄生株率は2.3%（前年：0%、平年：0.4%）であった。
 - イ 朝倉町長淵のフェロモントラップによる誘殺虫数は、6月5半旬～7月2半旬で240頭（平年：112.8頭、前年：216頭）、7月2半旬～7月5半旬で114頭（平年：112頭、前年：99頭）であった。
 - ウ 気象予報では、8月の平均気温、降水量は平年並と予想されている。
- (3) 防除上注意すべき事項
 - ア 今年は、誘殺虫数が平年より多く（発生時期も早く）、今後の発生動向には注意が必要である。
 - イ 中齢以降の幼虫に対しては薬剤の効果が著しく低下するので、早期発見に努め、薬剤防除は孵化直後の幼虫をねらって行う。
 - ウ 施設栽培では、成虫の飛び込み防止のため4mm目以下の防虫ネットを隙間なく張る。
 - エ 葉身に産みつけられた卵塊から孵化した幼虫はそのまま葉身内に食入し、内部から食害するため、卵塊や初期の被害葉は見つけ次第直ちに除去する。
 - オ 各種薬剤に対する感受性が低下するのを避けるため、同一系統薬剤を連続して使用せず、数系統の薬剤を組み込んだロ・テ・ション散布を行う。



フェロモントラップによるシロイチモジヨトウの誘殺数の推移 (朝倉町長淵)

8 野菜共通のハスモンヨトウ

(1) 予報の内容

発生量：平年・前年より多い

(2) 予報の根拠

ア 筑紫野市のフェロモントラップによる7月の誘殺虫数は、872頭（平年：276.9頭、平成10年：418頭）と平年より多く、多発生年の平成10年よりも多い。

イ 7月5半旬の野菜類調査では本虫の寄生は認められなかったが、サトイモには寄生を確認しており、今後、野菜・花き類にも被害が発生する恐れがある。

ウ 大豆では7月下旬に県内各地で白変葉の被害が発生し、8月1日に注意報が発令された。

エ 気象予報では、8月の平均気温、降水量は平年並と予想されている。

(3) 防除上注意すべき事項

ア 幼虫は集団となって葉を食害し、その後周囲に分散するので、初期の食害発生に注意し、卵塊や幼虫は見つけしだい捕殺する。ハウスでは、支柱やベンチの裏等に卵塊を産み付けることがあるので注意する。

イ 老齢幼虫に対しては薬剤の効果が低いので、早期発見に努め、防除効果の高い若齢幼虫期に防除を徹底する。

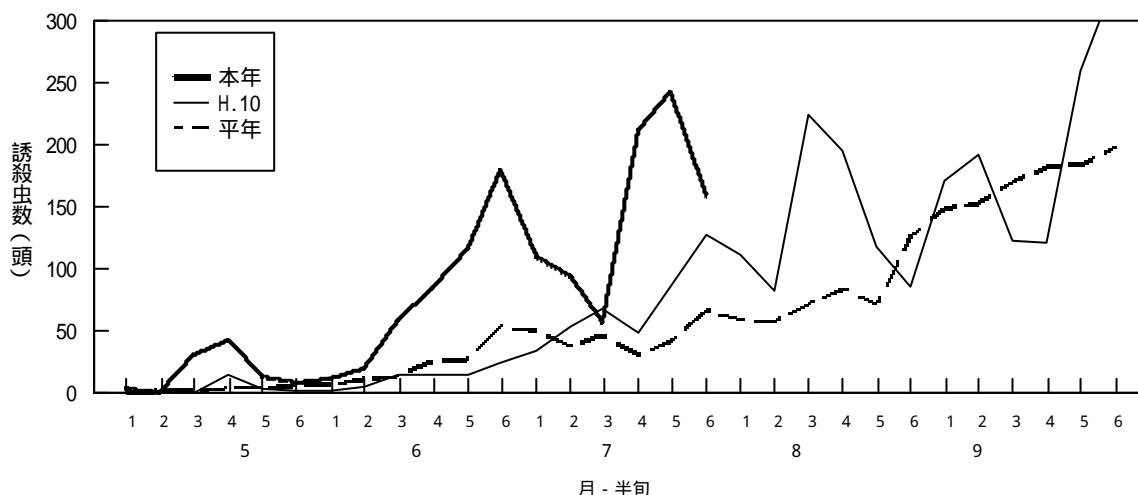
ウ ナス、トマト等の果菜類では、葉以外にも花蕾や果実を食害する場合があるので注意する。

エ ほ場周辺の雑草は増殖源になるので、丁寧に除去する。

オ 防除薬剤については、平成14年度野菜及び花き花木の各病害虫防除基準を参照のこと。

カ 農薬安全使用基準を守り、危被害防止に努める。

キ 発生予察情報や当所のホームページに掲載しているフェロモントラップの誘殺状況に注意する。



ハスモンヨトウのフェロモントラップによる誘殺虫数の推移（筑紫野市）

8月の気象予報（1か月）

（予報期間 7月27日～8月26日）

2002年7月26日
福岡管区气象台発表

【概要】

向こう1か月の平均気温は平年並、降水量は平年並、日照時間は平年並の可能性が大きいでしょう。

【要素別確率】

（単位％）

要素	低い （少ない）	平年並	高い （多い）
気温	10	50	40
降水量	30	50	20
日照時間	20	50	30

- < 1週目の予報 > 7月27日～8月2日
この期間の平均気温は、平年並の可能性が大きいでしょう。
- < 2週目の予報 > 8月3日～8月9日
この期間の平均気温は、平年並の可能性が大きいでしょう。
- < 3～4週目の予報 > 8月10日～8月23日
この期間の平均気温は、平年並か高い可能性が大きいでしょう。

参考資料

福岡における平年値

向こう1か月の平均気温、降水量、日照時間と1週目、2週目、3～4週目の平均気温

向こう1か月			平均気温（ ）		
平均気温（ ）	降水量(mm)	日照時間(h)	1週目	2週目	3-4週目
27.8	181.6	203.6	28.1	28.0	27.7

病虫害防除所では、病虫害の発生状況と防除について、ホームページとテレホンサービスでお知らせしています。アドレス及び番号は下記の通りです。

ホームページアドレス

www.jppn.ne.jp/fukuoka.

電子メールアドレス

kfok0301@sp.jppn.ne.jp

テレホンサービス

092-928-6401（普通作・イグサ）

092-928-6402（果樹）

092-928-6403（野菜・茶）